



中尾の
家族心理学
(6)

押しつけのパラドックス (3・4)

親の望みと正反対に子供が育つわけ

中尾英司 (家族相談士・シニア産業カウンセラー)



押しつけのパラドックス (3)

親の望みと正反対の子供が育つわけ

親が我が子に、「明るく素直で活発な子」を望んでいたとしよう。その反対は、「暗くひねくれてぼーっとした子」だ。すると、「明るく素直で活発な子」にしたいがために、親のセンサーは「暗くひねくれてぼーっとした」言動に敏感に反応し、そこを無意識のうちにチェックするようになる。子供をあるがままに受け止めることが出来れば気にならないことがどうしても気になり、その言動を注意するようになる。注意する部分は、「暗くひねくれてぼーっとした」言動だ。

「暗くひねくれてぼーっとした」部分に注意を受けると、言うことはどういうことだろうか。「暗くひねくれてぼーっとした」部分に注意を向けさせられる＝意識させられる、と言うことである。前頭葉が日常的に刺激を受け続ける、と言うことである。すると、注意を受け続ける子供の方は、「暗くひねくれてぼーっとした」部分を過剰に意識するようになる。そして自分は「暗くひねくれてぼーっとした」子なんだと思うようになる。親が望んでいる方向と、全く逆の方向に子供が育ってしまう。このカラクリが、実はとてもシンプルであることがわかりだと思ふ。

さほど注意をすることでもないことに、注意する。注意とは、その言葉通り、「意識を注ぐ」と言うことだ。相手のエネルギーが自分のその部分に注がれ、介入してくるわけだ。介入された方は、嫌でもその部分を意識せざるを得ない。言われなければ素通りしていたことを、日常的に気にするようになる。それは、「常に意識せよ」というメッセージが、親から来ているからである。「意識する」ということは、アンテナが立つということだ。意識したことに合致する事実

をアンテナは拾い始める。やがて、過剰に注意を受け続ける中で、「自分は暗くひねくれてぼーっとした子なんだ」と思うようになる。いつしか、それを説明する「言葉」に出逢う。たとえば、「うどの大木」という言葉だ。まるで、それが自分のことを象徴しているように思える。こうして、言葉を得たとき、自分に対する「レッテル貼り」が完成する。

生まれたときの子供は、どのようにも育つ可能性を秘めている。しかし、親との関係の中で「自分とこの世の関係」が形成され、「自己概念(自分に対する自分の持つイメージ)」が形成され、さらに親の言動がその自己概念を強化していく。でも、実は、その子は「暗くひねくれてぼーっとした」子なんかではないのだ。というか、そもそも生まれつきでそういう子などいないのだ。

押しつけのパラドックス (4)

作られた自分の「性格」に気づこう

結局、「明るく素直で活発な子」を望んでいた親が日常的に子供にかけられる言葉は、「暗くひねくれてぼーっとした子」という言葉だ。驚くべきパラドックス。親は自分の望みとは逆の言葉を子供に言い聞かせ続けるのである。子供はどうなるだろうか。

■1: まますぼーっとする

自分が「暗くひねくれてぼーっとした子」と思いこむ(刷り込み(インプリンティング)効果)

→ 現実が嫌なので、空想の世界に逃げ込む(空想癖:外からはまますぼーっとしているように見える)

■2: 人付き合いが苦手になる

親はまますぼ小言を言い、現実自分を救ってはくれない、どうでもよくなっていくため、たとえば人の名前や顔を覚えるのが苦手になる(現実に疎くなる)

→ 人間関係が面倒、舌手、人付き合いが嫌になる、さらに自分の世界に閉じこもる(自閉的になる)

■3: 自信がない

朝から晩まで、ことある毎に親から注意を受ける(お前はダメだというメッセージを受け続ける)

→ 何をしても、自信を持って出来なくなる、自分に自信がない。ハッキリと自分の意見を言えない、意志を貫くことが出来ない、自分の思いを通すことが出来ない、優柔不断、付和雷同、引っ込み思案になる。

■4: 自ら行動できない

やることなすこと注意を受けると言うことは、「自分の判断で行動するな(すれば罰する)」という「禁止令」を受けるとなる。

→ やるまえから、注意されることを考えて出来なくなる。失敗を恐れる。心理学的には、禁止令を受けるので当然自主的な行動というのは出来なくなる。

■5: イライラする

朝から晩までことある毎に親から見下げられている(ディスプレイ)

→ あるがままの自分を認めてもらえない不満が心のコップに蓄積し、心の余裕が無くなりイライラしてくる。

■6: 独り言が多くなる

イライラを吐き出すため、自分を認める人間がほしいため、独り言を言うようになる(多くはトイシで)。



→ それを人を選ばず、あるいはそれを指摘されてますます人が舌手になる。

■7: キレやすくなる

親から日常的に「ダメだ」というメッセージを受け、ディスプレイを受け、自分がスタスタに傷ついているため、これ以上、ほんの少しでも、自分が傷つきたくないと思う。

→ 心のコップが既に一杯一杯の状態だから、外から入ってくる余裕など無い。まして、それが指摘や忠告、アドバイスであっても、自分の弱点をつつくものであれば、カット「逆ギレ」する。外からは「癪癪持ち」、「ヒステリー」と見られる。

■8: 謝ることが出来ない

自分を保つことの出来る「最低ライン」で、日々生きている。そのため、自分がこれ以上傷つくことを、極端に恐れるようになる。これ以上傷つくとうとう自分から分からないからだ。

→ 人からは高慢に見えるが、実は、傷つくと怖くて謝ることが出来ない。

■9: プライドが高い

プライドが高く見えるのも、傷つくと怖いのと自分で自分を支えるしか自分を守る術がないからだ。プライドを手放したときに自分が崩壊しそうな危機を感じているからである。「人から認められたい」という自己認知執着を持っているので、「仲間はずれ」に傷つく一方で、自分を守るため、まます非社会的になっていく。

そう、親が「暗くひねくれてぼーっとした子」という言葉を子供に言い聞かせ続ければ、「子供は親の言うとおりに育つ」のである。しかし、子供よ、自分に絶望しなくていい。ここに見たように、自分の9つの「9るしい」性格は、自分本来の性格ではないことにお気づきだろう。

それはあなた自身ではない。このような環境下であれば誰しもがそうなる当然の心理メカニズムなのだ。作用に対する反作用なのである。

つまりは、この環境条件が変わり親からの作用が無くなれば、反作用としてのこれらの「性格」は不用となるものなのだ。だから、これらの疑似性格が善き起こしたことについて自分をことさらに責める必要はどこにもない。卑下する必要もない。

だから、自分に貼ってしまったレッテルを引っぺがしてしまおう！そして、本当の自分を探しに行こう！！本当の自分は、あなたに発見されるのを心から待っている♪

(中尾英司)

※本稿「押しつけのパラドックス(逆説)」は、全6項あります。中尾先生のブログでも公開されていますので、全てご覧になられたい方は、「あなたの子どもの加害者にならないために」(Google入力)でご訪問ください。(ハビリオン編集部)

<著者紹介>

中尾英司

(家族相談士・シニア産業カウンセラー)

■メール: sodan@jiritusien.com

■プロフィール: 協和発酵で組織改革を成功させた後独立。「あなたの子どもの加害者にならないために」で少年A(酒鬼薔薇)の心理メカニズムを家族心理学の観点から初めて解き明かした後、虐待、不登校、引きこもり、各種依存症、モラハラ、DV、世代間連鎖の問題を抱える家族を訪問カウンセリングしている。海外からメール相談もある。産業カウンセラー試験作成委員(06-07)、テレビ東京、TBSにコメンテータ出演。

■著 作: 「あきらめの壁を打ち破った人々」(日本経済新聞社) / 「あなたの子どもの加害者にならないために」(生活情報センター)

■サイト: 「中尾相談室」, 「組織改革ご支援.COM」.

■ブログ: 「あなたの子どもの加害者にならないために」

※中尾先生のオンライン講座も受講中です。詳しくはサイト「中尾相談室」を参照。